

今日の福音書の箇所に出てくるイエス様の言動について、私たちは、あまり素直には受け入れられないのではないか、と思います。自分の子どもが病気なので、必死でイエス様に助けを求めている、このカナンの女の人に対して、イエス様は3回も、拒否するような態度や発言をしておられます。

最初は、この女性の求めに対して、「何も答えない」という態度です。

2番目は、「わたしは、イスラエルを失った羊のところにしか遣わされていない。」という発言。

3番目は、「子供たちのパンを取って子犬にやってはいけません。」という発言です。

どうして、イエス様は、このような冷たい態度を取ったのでしょうか。よく言われるのは、この女の人の信仰を見られるためだった、という解釈です。おそらくそうだろうと思います。

イエス様は、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。」と山上の説教で教えられ、それをティルスとシドンという、イスラエルの外の、外国で、その信仰を持った女性に会われたのでしょう。必死なひたむきさを期待された。

しかし、それにしても、気になるのは、2番目に拒否された時の言葉です。

「わたしは、イスラエルを失った羊のところにしか遣わされていない。」という発言は、私たちのような、イスラエル人ではない者には、素直に受け取れない言葉のように思われます。

そこで、これを理解するには、もう少し、イエス様の発言の背景を知っておく必要があります。

実は、今日の箇所は、イエス様が弟子たちを連れて、唯一、イスラエルを出られた時の出来事です。このマタイによる福音書の立場からすれば、イエス様は、生まれたばかりの時、恐ろしいヘロデ王から逃れるために、一家でエジプトへ逃げたこと以外、成長するまで、外国にでかけたことがありませんでした。そして、このカナンの女を癒される話が、イエス様の公生涯で唯一の外国でのお話です。

しかも、それは、「伝道するため」ではなく、「弟子たちを静かな所で教育するため」だったろうと言われています。イエス様の活動は、その大半が、ガリラヤ湖の周辺地方でした。ところが、大勢の人に食事を与えたり、病気の人を治したりすると、噂が広まって、人びとが押しかけてきます。そのほかに、イエス様の存在を面白く思わない、ユダヤ教の、律法学者とかファリサイ派がつきまとうので、弟子たちに、落ち着いて教育できないのです。ですから、外国に行こうとされたんです。

イスラエルの外に出ると、律法学者やファリサイ派は、そこまではイエス様については来ません。自分たちを、神様から選ばれた民だと信じて、外国人を軽蔑している人びとですから、わざわざ外国人と接触するようなことは避けるからです。イエス様は、御自分の生涯の活動の場所、特に伝道の対象は、イスラエルという、限られた範囲だけにしようとして決めておられたのではないかと、少なくとも、赤ちゃんの時、エジプトへ行った以外は、イスラエルを離れたのは、今日の箇所だけです。

そして、イスラエルの国の中だけで活動し、弟子たちの教育に徹しておられたから、救いの業を完成することができたのではないのでしょうか。

そのように徹底した、自己限定と申しましょうか、限られたところで、力を集中したので、イエス様は天に昇られる時、そのあとを受け継ぐ弟子たちに、

「あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」という命令をして、世界中に送り出せたのです。

もし、イエス様が、御自分でローマ帝国に出て行って、救いの業を完成しようとするなら、対象になる地域の広さ、人びとの多さのために、とても3年では活動できなかったことでしょう。

ただ、求めに応じて、どこへでも出かけていたなら、弟子たちの教育もできなかったし、それを実現するには、何十年間、いや何百年も活動しなければならなかった、と思うのです。

そのような、イエス様の原則があったから、このような発言になったのではないか、とされています。

そして、もうひとつ、今日の、カナンの女の人の人へのイエス様の言葉ですが、
「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない。」という言葉にしる、
「子供たちのパンを取って子犬にやってはいけない。」という言葉にしる、言葉だけを見たなら、ユダヤ人だけが特別であって、外国人は、子犬に等しい、という差別発言のように見えます。

しかし、イギリスのある聖書学者が書いている言葉ですが、「言葉というのは、言う人の調子や表情で、違った意味をもってくる。」と言うのです。

『ひどい言葉も、微笑があるとその調子がやわらぐ。友人に対して、笑いながら「悪者」とか「いたずら者」といえば、その言葉はとげがなく、愛情すらも感じさせる。この場合、イエスの顔にうかぶ微笑みと目にたたえるいつくしみが、この言葉の中に侮辱と憎しみを感じさせなかったに違いない。』

イエス様が、「私は、いつもイスラエル人を相手にしているんだ。子犬のような外国人は、相手にしないんだよ。」ということを笑いながら言ったので、この女の人も、イエス様の微笑とまなざしに安心して、ちょっと茶目っ気か、ユーモアを含んで、「子犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」と、返事をしたと思うのです。

私たちが、このイエス様の発言や行動から学ばなければならないこと、それは、ただ、やたらと手を広げるのではなく、自分にハッキリした生き方が決まっているなら、それに徹して、毎日着実に生きてゆくことなのではないか、と思うのです。